1章

【問題】（演習）

出典…木俣元一『中世芸術に近づく、中世芸術が近づく』／早稲田大学　文学部　10年

文章略解

現代の、日常性との差異を強調する芸術観とは違って、人間の日常的な営みと深く関わるのが中世の芸術であった。中世の芸術の有り様を見ると、現代では芸術扱いされていない様々な文化と相通ずる要素を見いだすことができるが、それは当時の社会の多様な階層文化にまたがる存在であった。現代の私たちの日常的実践からの類推を通して、その共通点や相違点を検討することで、中世の芸術に対する理解の可能性が開かれる。

解答

問1　現代で～ない。〔46～48行目〕　問2　ニ　問3　ハ

問4　イ・ハ・ホ　問5　ハ　問6　関わり〔3行目ほか〕

問7　イ・ニ

【問題】（演習）

出典…清少納言『枕草子』／國學院大学　文学部　97年

現代語訳

（中宮定子さまの）お身内の方々や*摂家、*清華などの若い子弟の方々、殿上人など、中宮定子さまのお側に人々が大勢伺候していたので、（私は）庇の（間の）柱に寄りかかって、（同僚の）女房と世間話をしていたところ、（中宮さまが私に）なにか物をなげてくださった（ので）、開けてみると、「（あなたのことを）大切に思ってあげようか、どうしようか。（大切にされる場合でも）一番に大切にされないとしたら、どうですか」と記しておいであそばす。

（これは、私が）中宮さまのお側で（同僚の女房と）話などをするときにも、「だいたい、人から一番（大事である）と思われないなら、何になろうか（、いや、何にもならない）。いっそひたすらに憎まれ、冷たくされていた方がよい。二・三番（目の者として考えられる状態）では、死んでも（その状態では）いたくない。（必ず）一番（大事）として（思われて）いたい」などと（私が）言うので、「（それでは、）法華経の一乗の法（のよう）だ」などと、人々も笑う、そのことについての（お尋ねの）ようらしい。

（中宮さまが）筆や紙などをくださったので、「（第一番とは申しましたが、中宮さまの御寵愛をいただく）九品蓮台のうちなら、（最下級の）下品でも（かまいません）」などと書いてお手許にお届けしたところ、（中宮さまは）「ひどく自信をなくしてしまいましたね。それはほんとうにいけないわよ。いったん言い切ったことは、そのまま通すのがよいの」とおおせあそばす。（私が）「それは（相手の）人によってで（ございます）」と申し上げると、「それがいけないのよ。一番優れている人に、やはり一番に愛されようと思うのがまことによいの」とおおせあそばすのが、（私には）たいへん嬉しく感じられる。

訳注

○摂家＝摂政や関白になりうる家柄。

○清華＝大臣・大将を兼ねて太政大臣まで昇進しうる家柄。

解答

問1　イ　　問2　ウ

問3　(c)　イ　　(d)　オ

問4　イ　　問5　であるようだ〔解答例〕

問6　一にてをあらむ〔4行目〕

問7　(1)　エ　　(2)　カ

問8　(A)　1　イ　　2　オ　　3　イ

(B)　1　エ　　2　カ　　3　ウ

【問題】（自習）

出典…高階秀爾『近代絵画史』／オリジナル問題

文章略解

完全無欠な理想の美を目指した古典主義に対し、個人の感受性を重んじたロマン主義は、美の規範的ヒエラルキーを打破し、芸術家の個性に根ざした様々な美を生み出した。ここに、様式上の統一性を失った「近代」絵画の誕生が約束されたのだ。しかし、ロマン派の芸術家たちは楽天的な「進歩主義者」ばかりではなく、自己と他者の疎隔や、自己と社会の分裂に悩む者も多かった。「近代の苦悩」ロマン派の時代にその萌芽を持っていたのだ。

解答

問1　ハ　　問2　近代絵画の～められる。〔39～40行目〕

問3　A＝ニ　D＝ロ　E＝イ　F＝ホ　G＝ハ

問4　B＝醜　C＝美

問5　①＝崩壊　②＝奔放　③＝擁護　④＝啓蒙

問6　ロ　　問7　ロ　　問8　ホ　　問9　ロ

解説

問1　脱文挿入問題に対処するには、まずは挿入文に注目のこと。挿入文の中に①「他との関わりを示す言語要素」・②「筆者独自の表現」などがあれば要チェックだ。ここでは挿入文冒頭の「とすれば……」という表現が因果関係を導くため、この文を入れるべき箇所の前にはこの文の内容の根拠が叙述されている、ということがわかる。

また、挿入文の中では「近代」というカギカッコつきの表現も用いられている。この表現は問題文（地の文）の中では30行目と、49行目の二カ所。ここに関連づけて挿入文を入れようとするならば、**ハ・ホ**の二カ所に入れることになる（他の三つの候補箇所には、カギカッコつき「近代」につながる記述が見いだしにくい）。**ハ・ホ**はいずれも「ロマン主義」と「近代」との関連を述べている文の後にあるが、この両者を見比べる際に決め手となるのは、**ハ**の直前の「誕生が約束されたのである」（30行目）という表現である。この流れに合わせるなら、「落とし子」という文言を含む挿入文はここに入れるのがより適切だ、と判断できよう。**ホ**では単に「出発点」というだけで、「落とし子」という文言との結びつきがやや弱い（また、この箇所の直前にある「近代」という語にもカギカッコがついていない）。

問2　この種の問題に対処するには、まず設問に注目し、「この文章の中にはどこかひとつ不要な文がある」と思い定めて読んでいくことだ。

一方、解答になる文は、①「指示語の指示関係がおかしい」・②「それまでの中心的な話題からいきなり外れる」・③「唐突に一般論になる」……などの性質を持っている。そんなことを頭に置いて、丁寧に問題文の論理を追っていくと、解答の文が見出せる可能性が高まる。

この設問は②のパターン。「ロマン派の芸術家たち」（38行目）の例として挙げられているのが「ユゴーは、長編小説……」（40行目）以下にあるように、小説家なのである。それなのに「近代絵画の展開の……」と述べている文が入っているのだから、このまま読み進めると明らかに話題が変わってしまう。というわけでここを抜くのが正解。

問3　空欄補充で「それぞれ」と設問にある場合には、重複が許されない場合が多い。基本的に「入れやすいところ（入る必然性の高いところ）」から入れていくことを考えよう。

Aについては、二つ後の文（3行目以下）において、「つまり……」と言い換えられているところが手がかりになる。この文では「ロマン主義の運動は……あの大革命と同じことを、三十年ほど遅れて、芸術の分野でなしとげようとしたものだ」（4～5行目）と述べられており、これに見合うものを選択肢の中に探していくなら、「遅れて来たフランス革命」としているニ以外にはあり得まい。

Dについては、この部分が前の「ロマン派が何よりも感受性の優位を信じた」（21行目）ことの具体例に相当していることをつかむことが肝要である。選択肢の中で「感受性」に相当する文言を持っているのは「感じ方」と述べているロのみ。

E・F・Gは一連の流れの中で捉えられる。これらはいずれも「ロマン主義こそ、最も新しい、すなわち『近代的』な芸術であった」（33行目）ことの表現である。そしてEよりはF・Gの方が「もっとはっきりと」（35行目）したものである、とされている。また、Fの直前には「ロマン主義こそ」と主語があるのに対してE・Gにはそれがない。ここから推すならば、主語を含まないホをFに入れるべきであり、イ・ハのうちでより明確な物言いをしているハをGに、これと比べてやや冗長なイをEに入れるのが適切だ、と判断できよう。

問4　二つの空欄を含む文の直前に「美は……『性格』のなかにこそある」（16～17行目）と述べられており、それに導かれる形でこの文が述べられていることを押さえるならば、この文の主語は「美」になるのが最も自然である。そう考えてCには「美」を入れる。こうすれば、続く文で「……独自の美の世界を作り上げていった」（19～20行目）と述べられているところにも合う。一方のBについては、この「美」と対比されるべきものが入るわけだから、漢字一字で「醜」を入れる。「美醜」という熟語があるように、「美」と対になるのは「醜」。

問6　傍線部分を含む段落が「たとえば」（14行目）に導かれているように、この部分は前段落の「美のヒエラルキーを否定し……自由な創造活動を主張した」（12～13行目）ことの具体例になっていることをまずは押さえよう。この「自由な創造活動」は、傍線部分の後に述べられている「ホンポウな想像力」（19行目）に導かれるものである。だとすれば、この傍線部分に言う「性格」（カギカッコつき）とは、「個々人の自由なものの見方」の意味であると解されよう。

そこまで押さえてから選択肢群に目を移すと、ロの選択肢がこれらの要素をすべて満たしていることがわかるだろう。ハは「自

由な創造活動」を踏まえている点で近いが、「ロマン主義運動に身を投じた者」、つまりは人を主語にしている点に難がある。この傍線部分は、ロマン派の芸術における「美」を論じたものであり、ロマン派の芸術家のあり方を論じたものではないのである。**ニ**も「作品」を主語にしている点で**ハ**と同様に的はずれ。**イ**や**ホ**は、否定的な文言でしかない点で十分な説明にそもそもなっていない。「古典主義的発想の破綻」のあとに何があるのか、「美の規範が否定され」た後には何があるのか、を明言しない限りこれらの選択肢は「最も適当なもの」にはなりにくい。

問7 「ヒエラルキー」とは「階層的な秩序」の意味。この語義を押さえることも重要であるが、この設問に対処するにはむしろ、傍線部分直前の「その」の指示内容を吟味していく方が得策であろう。

それぞれの選択肢がこの「その」の指示内容をどう捉えているかを見てみると、以下のようになる。

イ 「美を判定する基準は……」

ロ 「美にはいくつもの……」

ハ 「美の判定には……基準が存在し」

ニ 「美にはいくつもの……」

ホ 「美の判定には確固たる規範が……」

「美」として捉えているのが**ロ・ニ**、「基準」「規範」として捉えているのが**イ・ハ・ホ**というわけだ。ここで筆者が「ヒエラルキー」なる語を他の箇所で用いている部分に目を転じるなら、「高貴なジャンルと卑俗なジャンルというような美のヒエラルキー」（12行目）に至る。これはさらにその前の「完全無欠な理想の美という観念を頂点として、その下にさまざまの段階の美が整然と配置されるという古典主義美学の考え方」（7～8行目）に相当している。これらの記述から考えるに、筆者が問題にしている「ヒエラルキー」とは「美のヒエラルキー」であり、「美の基準のヒエラルキー」ではないことがわかる。というわけで解答は**ロ・ニ**に絞られる。

残る二つの選択肢の吟味に際しては、**ロ**の「漸次的な発展のいずれかの段階にあり」という表現が、**ニ**の「結局のところ……統合されるべき」という表現に比べて「ヒエラルキー」＝「階層的な秩序」の意味に近いことから**ロ**を取る。

問8　直前の文にこの「苦悩」の内容について述べられた部分がある。「彼らの多くは、自己と他者との間の越えがたい隔たりを身にしみて強く感じており、自己と社会との分裂に悩んでいた」（46～47行目）の部分である。ここから、この「苦悩」は「自己」対「社会」「他者」という対立軸によるものであるとわかる。また、この傍線部分を指して、「それは矛盾した状況である」（49行目）・「それこそは……矛盾である」（49～50行目）など、「矛盾」という表現で評されていることにも注目。要するにこの「近代の苦悩」とは「自己」と「他者」「社会」との矛盾を意味するものなのである。ここまで押さえて選択肢を見るならば、「個性の発動」－「他者が理解しにくくなったという矛盾」と述べている**ホ**が、こうした要素をすべて満たしていることがわかるはずだ。**イ**は「自己と社会」に言及している点はいいが、その「関連性」という捉え方をしている点で**ホ**に劣る。**ロ**は「歴史」－「現実主義」という対立軸で捉え、**ハ**は「ロマン主義」－「古典主義」という対立軸で捉えているために、いずれも「自己」－「他者」という捉え方とはずれている。**ニ**は「社会」ということを踏まえてはいるが、「社会的に評価される芸術の創造」という点に難あり。あくまでもこの部分で問題とされているのは個人の内面にある「苦悩」である。創作のことではない。

なお、この設問においては、末尾の文言だけを見ていっても解答の選抜ができるようになっている（そう作ってある）。「矛盾」とぴたりと押さえているのが**ホ**で、他の選択肢は少しずつ意味のずれた言葉になっている……そんな絞り方もできるわけだ。

問9　「内容に合致するもの」を選ぶには、基本的には「選択肢から問題文へ」と考えよう。選択肢の中の特徴的な文言に着目し、それに相当する内容を述べた部分と照合していくのだ。

イの「市民革命」については、**問3**の**A**に「遅れて来たフランス革命」を入れたように、「フランス革命」が「一七八九年」（4行目）に起こったよりも三十年ほど遅れて「一八一〇年代の末から二〇年代にかけてはなばなしく」（3行目）ロマン主義運動が起こった……とする問題文の記述と順序が逆である。**ニ**の選択肢も同様に順序を逆に捉えており、これも問題文と一致しない。

ロの「さまざまな美の価値に階層的構造を認める考え方」とは、**問7**で検討したところの「古典主義美学の考え方」（7～8行目）に相当している。これは「ロマン主義運動」によって打破されるわけだが、それは前述のとおり一九世紀に入ってからである。したがって「十八世紀のフランス美術界においては……支配的であった」というのは誤りではない。

ハに述べられている「古典主義美学」の打破と「感受性を重視する考え方」の主張は、いずれもロマン主義運動においてなされたことであるが、この選択肢においては因果関係の捉え方が逆になっている。「古典主義美学の打破」が目的でそのために「感受

性重視」を打ち出したのではなく、「感受性重視」を打ち出したことの結果として「古典主義美学」が打破された、と捉えるのが妥当だろう。

ホの選択肢にある「矛盾」は、**問8**で検討した「近代の苦悩」に相当する。しかしながら、ここでは「『近代の苦悩』も、またロマン派の時代にその萌芽を持っていた」（47～48行目）・「何回となく姿を変えながら立ち現われてくる」（51行目）とあるように、ロマン派の芸術家たちの感じたことがそのまま「近代」につながっているわけではないことに注意。選択肢の記述では、そのまま「現在に至っている」ように読めてしまうのでこれも誤り。

【問題】（自習）

出典…紀貫之『土佐日記』より　／　関西大学　文学部　97年

現代語訳

（陰暦正月）七日になった。（でもまだ大湊という）同じ港にいる。今日は（宮中で）白馬（の節会が行われること）を思うが、（こんなに離れたところではそんなことを思い出す）甲斐もない。ただ波頭の白いのばかりが、（宮中を練り歩く白馬の列を思い出させるように、やたらに）目に入る。こうしている間に、（ある）人の家で池という（地）名のあるところから、（池の魚といえば何と言っても鯉だが、その）鯉はないけれど、鮒をはじめとして、川の（産物）も海の（産物）も、（そして）他の品々を（加えて）、長櫃に（いれ）担いで（いるのをいくつも）続けて（くるほどにたくさん持って）寄越した。（その中でも青々とした）若菜が、（私たちに、七草を祝う）今日という日を知らせてくれた。（贈り物と一緒に）歌が（つけて）ある。その歌は、

浅茅生の……（ここは）茅萱（ちがや）の（生えている）野辺ですから、（地名では「池」とは言っても名ばかりのもので、）水もないその池（の地）で摘んだ若菜なのですよ

（こんな田舎に住んでいる人の歌なのに、季節感と洒落のきいた歌で、）たいへんおもしろい。この「池」というのは、地名なのだ。（この歌を詠んで贈り物をしてくれた）身分ある（女の）人が夫について（都からこの地へ）下って来て、（今にいたるまで）住んでいたのだ。この長櫃の（中に入っていた贈り）物は、一行のみんな、（それこそ）子どもにまで（一行の長である前国司〔＝作者自身〕が）くださったので、（みんな）いやというほど満足して、水夫たちは（酔っ払ってその大きく膨れた）お腹を鼓がわりにたたいて、海までをびっくりさせて、（それこそ彼らが最も嫌がる）波を立ててしまいそうだ。

さて、この（港に滞在している）うちには（いろいろな出来）事がたくさんあった。今日、お弁当などを（従者に）持たせて来た人（がいて、さて）その名前などは、そのうちに思い出すでしょうか（、まあ思い出せなくてもどうでもいいような人ですが）。この人（がわざわざやって来たの）は、（古今集の撰者である前国司〔＝作者自身〕の前で）歌を詠もう（、その歌を見てもらおう）と思う下心があってのことなのだ。あれこれといろんなことを言って、「波が立つのが聞こえることですなあ」と心配そうに言って、詠んだ歌は、

ゆくさきに……（御一行が旅立つその）行く手に立つ白波の（大きな）音よりも、取り残されて声をあげて泣くであろう私（の泣

き声）のほうがもっと大きいことでしょうか

と詠んだものだ。よっぽど大声なのに違いない（、嗜みもなくあきれたものだ）。持ってきた（料理や酒などの結構な）ものよりは、歌はどんなものであろうか（、船旅をしようという者に向かって、「波」だの「白波〔＝海賊〕」だの別れには禁物の「泣く」だのと、まったく縁起でもない）。この歌を（船の人々は）口々に感心してみせるけれども、（内心では気分を害しているので）一人も返歌をしない。（うまく返歌を）することができそうな人もまじってはいるのだが、（返歌のことなど思い出しもしない風に）この歌を誉めるだけ、ごちそうを食べるだけで、（そのまま）夜が更けた。この歌の読み手は、（気まずくなったのか）「まだ帰りはいたしませんが」と言って中座した。（船の一行の）ある人〔＝作者自身〕の子でまだ幼い子が、こっそりと言う。「わたしがこの歌の返歌をしましょう」と言う。（みんな）驚いて、「それはまたおもしろいことよ。（うまく）詠みおおせるかな。きっと詠むと言うなら、早く言ってごらんなさい」と促す。（ところがその子は）「『（まだ）帰らない』と（断っ）て（席を）立った人（がここへ帰ってくる）のを待って詠みます」と（言うの）で探したところ、夜が更けたからということだったのだろうか、（その人は）そのまま行ってしまったという。「それにしても、いったい何と詠んだの」と、（みなが）不思議がって（この子に）尋ねる。（すると）この子は、さすがに恥ずかしがって答えない。（それでも）無理に聞きただすと、（やっと）口にした歌は、

ゆくひとも……旅立つ人も、ここに留まる人も、（別れの悲しさに）袖は涙（で一杯になって、その）川の水際は、（涙でます水嵩に）ぐんぐんと濡れてゆくことです

と詠んだものだ。（こんなに幼い子が）このようにも詠むものだろうか。（みんなこんなに感心したのはこの子が）かわいいからであろうか、なんとも思いがけないことである。（しかし、贈答歌の礼儀としては）「子供の（した）ことでは仕方がない。ばあさま・じいさま〔＝作者夫婦〕が（この歌を代筆して）署名捺印するのがよい。悪かろうが、どうであろうが、幸便があったら（この歌をあの人に）おくってやろう」と（言っ）て、（結局そのままにして）おかれたようだ。

（翌）八日、支障があって、やはり同じところにいる。今夜、月は海に入る（のが見えた）。これを見て、（あの在原）業平の君の、「山の端逃げて……山の稜線が月影から逃げていって、月を沈めないようにしてもらいたいものだ」と詠んだ歌が思い出される。もしも（彼がこの歌を）海辺で詠んだとしたなら、「波立ち障へて……波が邪魔をして月を沈めないようにしてもらいたいものだ」とでも詠んだことだろうか。今この歌を思い出して、ある人〔＝作者自身〕が詠んだという（歌は）、

照る月の……照る月が（西へと）流れて（海へ沈んでゆく様子）を見ると、あの天の川の流れ出る河口も、（この地上の川と同じ

ように）海だったのだなあ
とか（いったということだ）。

参考・問6

惟喬親王が狩りをした（ときの）お供に参って、宿泊所に帰って、一晩中酒を飲み、よもやま話をしていたところ、十一日の月も沈もうとしたときに、親王が酔って奥（の寝室）へ入ろうとしたので詠みました（歌は）、

在原業平

あかなくに……まだ充分に満足もしていないのに、もうすでに月が隠れようというのか。山の稜線が（そこに入ろうとする月から）逃げて（月を）沈ませないでいてほしいものだ

解答

問1　d　　問2　b

問3　i＝まだまからず　　ii＝またまからず

問4　b　　問5　c

問6　(キ)＝c　(ク)＝h　(ケ)＝b　(コ)＝i　(サ)＝e　(シ)＝j

解説

問1　選択肢を読み比べると、傍線部の「もてきたるものよりは、歌はいかがあらん」を、「持ってきた料理などに比べると、歌はまずい」の意味で取るべきことは明らかである。実際に、傍線部のあとを見ると、みな口先ではこの歌を一応誉めながら、だれも返歌をしていない。問題はなぜこの歌がまずいかであるが、まず一般的に、この歌が詠まれた場面に相応しくないからであろうと考えるとよい。この場面では、地元の人物が京へ帰る前国司を見送って歌を詠んでいる。『土佐日記』での旅は、問題文冒頭の「おなじみなとにあり」からもわかるように、船の旅である。航海の平穏無事を祈るのが当然の場面で、「波が大きな音を立てる」、つまり「海が荒れる」ことにつながる不吉なことを詠んでいるのはまずいだろう。さらにまずいのが、「白波」には「盗賊」の意味があり、これから海の上を行こうとする人々が「白波」と聞けば、単なる波だけでなく「海賊」を連想するのは無理もない。また、当時の人々は心が動いたときに涙を流すのは、男女を問わず全く恥とは思っていないのだが、ただし旅立ちに際して泣くのは、新たな門出には相応しくないとして禁忌となっていたのも覚えていてよい。

以上を前提として選択肢を検討する。まず、あきらかにおかしいのは、aとcである。aは「歌は本来（中略）小さな声で詠むべき」が不適。女性が室内で男性と二人きりでいる時などは別として、一般には別にそんなことはない。cは「ほめてくれるだろうという気持ちがみえすいている」の部分が、文中に該当する箇所が見られないので不適。bはとりあえず直後の「いと大声なるべし」という皮肉と呼応するので、この段階ではとくに排除しない。dは瑕なし。eはこれも確かにそれはそうである。さてこのb・d・eを比べると、eは「不快感を与えた」と言っているが、b・dの表現のほうがより明確にその不快感の原因を述べているので、eはこの中では一番遠い。b・dの違いについては、dに「旅路に不吉」という表現が明示されているので、こちらがよい。

問2　傍線部は、直前が《四段動詞「まじる」の已然形（命令形）》であり、直後が《接続助詞「ど」》なので、《存続の助動詞「り」の已然形》だとわかる。

aは、傍線部の直前が《四段動詞「呼ぶ」の未然形》で、直後が《接続助詞「て」》なので、「れ」は《助動詞「る」の連用形》である。なお、この場合「る」は、直前の「呼びに文持てきたなり」と呼応して、《受身》の用法になっている。

bは、傍線部の直前が《四段動詞「出だす」の已然形（命令形）》であり、直後が《接続助詞「ば」》なので、「れ」は《存続の

助動詞「り」の已然形》で、これが正解。

cは、傍線部の直前の動詞が《四段動詞「見やる」》であり、この未然形に《助動詞「る」の已然形「るれ」》が続く形になっている。傍線部だけ言うなら、《助動詞「る」の已然形の一部》である。なお、この場合、直前の動詞が心情・知覚にかかわる動詞なので、《自発》の用法になっている。

dは、傍線部の直前の動詞が《上二段動詞「落つ」》であり、この未然形に《助動詞「らる」の連用形「られ」》が続く形になっている。傍線部だけ言うなら、《助動詞「らる」の連用形の一部》である。なお、この場合、主語が「ふなぎみ」なので、《尊敬》の用法と見ればよい。

eは傍線部の直前の動詞が《四段動詞「ぬれまさる」》の連用形で、「れ」を含む部分が係助詞「こそ」の結びとなっているので、《助動詞「けり」の已然形の一部》である。なお、この場合、和歌の述語部分に使われているので、《詠嘆》の用法となっている。

問3 受験生諸君の目に触れる文章は、学者の解釈によって濁点が施されているが、手書きの古文では濁点をうたない表記が普通なので、このように複数の解釈が可能な部分もままあるものである。「またまからす」のうち濁点をうてるのは「た・か・す」の三字であるが、二つの解釈の動詞が「帰る」・「戻ってまいる」とどちらも移動を示す動詞なので、「まかる」を「まがる」と読む必要はない。

そこで上の「また」を「まだ」と濁って読むと、これは否定表現と呼応する《陳述》の副詞なので、文末は《打消の助動詞》となって必ず濁点を打たなければならない。すると「まだまからず」となり、これでⅰの意味になる。（続く文の「『まからす』とて立ちぬる人を待ちてよまん」の部分から、この解釈が有力である。）

さて、上を「また」と濁らずに読むと、「またまからす」・「またまからず」の二つの読みが考えられるが、「まからす」では「まかる」に使役の助動詞を接続させた形になり、ⅱの「私が来る」という意味にそぐわないので、「またまからず」がⅱの意味になることになる。ここで「ず」を《打消》の意味にとるとおかしなことになるので、こう読むのに抵抗があった諸君もあるかと思うが、実はこの「ず」は《意志》の助動詞「むず」を使った表現で、「まからむとす」→「まからむず」→「まからうず」→「まからず」となったものなのである。現代語の「負けず嫌い」の「ず」も同じで、「まけむず」が「まけず」と発音されるようになったのであって、「負けないのが嫌い＝勝つのは嫌い」ではなく「負けるようなことが嫌い＝勝ちたがり屋」の意味である。

問4　選択肢の表現に共通点が多いので、グループ分けすると楽に解ける。

まず、この歌が旅立つ人を送る（つもりで詠まれた）歌への返歌であることに鑑みて、「とまる」を「今晩ここに泊まる」としているa・cを排除する。

のこるb・dの違いは、濡れるものである「みきは」をどう取ったかによる。この歌は、「そてのなみたかは」の部分で、前問で見たのと同じようにこれを「袖の涙川」と濁って読むべきことがわかり、「みきは」には「身際」と「汀（＝水際）」の二つの解釈が考えられるが、直前の「袖の涙川」とのつながりで解釈すると、bのように袖を川岸に喩えた表現のほうが妥当性が高い。

問5　傍線部を「おんな・おきな」の並列表現と見るべきであることは一目瞭然。「おきな＝翁」は男性の老人であるから、「おんな」は女性の老人「嫗（媼）」であると見るのがよい。したがってcを取る。なお、「老婆」に相当する古語は古くは「おみな・おうな・おんな」などと表記された。単なる女性の「女」の場合、古典仮名遣いでは「をみな・をうな・をんな」などと書かれる。

問6　陰暦では日付と月の形が対応する点を考える。十一日は一ヵ月の前半で、月が満月に向かって太ってゆく期間であり、この期間の月のうち半月（八日ごろ）前後の月を「上弦」と呼ぶ。これで㋕＝hとなる。月は中天にあるときの向かって右側から満ち、また欠けてゆくので、上弦の月は月の右側が照っている。これで㋖＝cとなる。（なお、「上弦」の名は、月を、斜め上に弦を張った弓に見立てた表現である。下弦は逆に斜め下側に弦がある弓の形。上弦の「上」を「うえ」と読んで、ひらがなの「う」の形に似た月が「上弦」、下弦の「下」を「した」と読んで、ひらがなの「し」の形に似た月が「下弦」という覚え方も紹介しておこう。）

さて、月は毎日昇る時間が遅くなり、満月はちょうど日没ごろに空に出るので、一ヵ月の後半ではさらに遅くなり、月のあるうちに夜が明ける。これを「有明」というのであった。ここから逆に考えると、八日の月は十一日の月よりも早く昇ることになる。これで㋜＝e・㋝＝jとなる。このころがちょうど半月である。

さて、歌の内容は通釈のとおりであるが、詞書（ことばがき）を見ると惟喬の皇子が寝（やす）むために奥に入ろうとする際に業平によって詠まれた歌だとわかるので、「入る」ことの共通点から月は親王を象徴する。これで㋗＝bとなる。さらに、歌の最後に未然形接続の《誂えの終助詞「なむ」》があることから、山の稜線に月を入れないことを望む表現になっているが、「月を入れるな」とは「親王を寝

かせるな」ということになるので、これで㈡＝ｉとなる。

念のために、月齢による月の異名の代表的なものを列挙しておこう。「朔（ついたち）」（月初めのころの数日）、「上弦」（七日か八日ごろの半月・あるいはその前後）、「夕月夜（ゆふづくよ）」（上旬）、「小望月」（十三夜）、「望月」（十五夜）、「十六夜（いざよい）」、「立待（たちまち）」（十七夜）、「居待（ゐまち）」（十八夜）、「臥待（ふしまち）・寝待（ねまち）」（十九夜）、「更待（ふけまち）」（二十夜）、「下弦」（二十二日ごろの半月・あるいはその前後）、「有明」（下旬）、といったところである。